

「静岡的な良さ」、 実感できる発信を

二十世紀記憶装置@ワンダー、
ブックカフェ二十世紀 店主

鈴木 宏さん

Hiroshi Suzuki



経歴

静岡市葵区生まれ。県立静岡高校卒業。大学卒業後、2年余のサラリーマン生活を経て、1986年、古本屋店を始める。2000年、東京・神田神保町に二十世紀記憶装置@ワンダー開業、15年、ブックカフェ二十世紀をオープン、現在に至る。59歳。

<http://atwonder.jimbou.net/catalog/index.php>

<http://jimbo20seiki.wix.com/jimbocho20c>

静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

時代の記憶を本で繋ぐ

大学を卒業後、脱サラして二十代で古本屋業を始めた。開業に当たっては、「自分は何が得意なのかということを一に考えました」という。

2000年、東京・神田神保町の古書店街にあるビル1階にワンダーを開業、昨年3月、2階にブックカフェをオープンした。古本屋を始めた当初6千冊だった書籍数は現在11万冊(両店舗合計)を越す。

「二十世紀の記憶装置というのは私の店のテーマです。自分たちの生きてきた時代の記憶を本の形で残し、次の世代につないでいく。店の名前もそういう意味を込めてつけました」。

ブックカフェ二十世紀のコンセプトは、「ゆったり空間、大人の部活空間」。来店客の協力などで平均週2回のイベントを開催。東日本大震災の被災地の地酒を飲む会(毎月11日)、落語会、イラスト展、ライブショーなど多様だ。民放番組の収録場所として使用されることも。

「古本屋には様々な分野、職業の人が来るんですね。商売とは別に、ある時期からそういう人たちが集えるスペースを作りたいと考えていました。いろんな議論、会合があって、その中に本も位置づけられるのではないかと。まだ始めて1年ですが、さらに工夫を重ねていきたいと思っています」。

単に「売る」はノー

仕事の関係でなかなか郷里へ帰れないという鈴木さん。「暖かく、住みやすい、食べ物もおいしい。そういう静岡市のイメージというか、実態を大事にしていきたいことが静岡の生きる道ではないかと思えます」。

自治体同士の競争には、どちらかといえば否定的。「今ある自分たちが持っている素晴らしいものをもう一度見直し、静岡の本当の魅力を伝えられるようになっていけばいいのではないだろうか」。

その上で、「難しいことですが、もうちょっと『静岡的な良さ』は何なのかを研究し、外部の人たちも実感できる発信ができたらいですね」と指摘する。

特産品などの販売についても「単に東京で売るといっただけではなく、製造過程やおいしい食べ方、安心な食べ物ですよといったことなどを丁寧にプロデュースしたらどうでしょうか」と提案する。

(文・写真…長田義明)